

「食」と社会階層に関する研究

—高校生に対する「食生活と家族関係」についての調査から—

佐藤 裕子*・山根 真理

1. はじめに

今日の日本社会では、様々な場面で、格差の拡大が指摘されている。収入の差、社会的地位や立場の差、進学や就職機会の差、余暇時間の過し方や老後の生活不安の差など、何かにつけて「勝ち組」「負け組」と二分されることも少なくなく、格差の是正は政治的な課題にもなっている。教育の場もその例外ではなく、学校間に「学力」の格差があることは、周知の事実である。

学校という場で序列化という言葉を目にする時、それは成績においてであると思われやすいが、果たしてそれだけだろうか。学校での生活は授業以外にも、休み時間、昼食時間、清掃、部活動など多くの活動時間がある。そうした時間の何気ない行動や生徒同士の話題などにも実は「格差」があるのではないか。学校には多くの生徒がいるのだから、個々の生活様式は当然のことながら様々である。しかしそれらは単なる違いではなく価値的な高低や優劣の感覚を伴う、ある種の「格差」として認識されているように思われる。

さらに現代の日本では、親がきちんと子育てをしなければならない、という社会的な圧力が強く、子どもの生活態度や行動は親、とりわけ母親の責任として認識されることが多い。家庭には様々な生活場面があるが、食生活はそうした中でも特に人の目につきやすく、話題にもなりやすい領域のひとつではないだろうか。家族のあり方が多様化する現在も、家族そろって食卓を囲むことは「望ましい」家庭の食事である、という見方は支配的であるように思われる。家事労働の社会化が進む一方、手をかけることの良さが強調される家事もあり、食生活はその傾向が強くみられる領域である。「食卓の団欒がない」=「家庭の崩壊」,「弁当を作らない」=「親の愛情不足」などとみなされ、食生活のあり方が家庭の望ましさを示す物差しにさえなっているようにも思われる。足立は「今日の非行や家庭内暴力、校内暴力といった状況も、一つには本来食卓を通して行われるはずの、家族間の楽しいコミュニケーションの欠如に由来するものではないのか」(足立, 1983, 25)としたが、こうした親の愛情や「心のこもった」食事を家族で囲む大切さを強調する傾向は、現在でも決して衰えてはいない。このように、子どもの食を人格形成の重要な要素とみなし、親の愛情や望ましい家庭像とともに語る言説の影響力は強いが、もっぱらイデオロギー的な言説として語られることが多く、社会構造的な理解が充

*) 本学大学院修了

分になされているとは言えない。

本研究では、生活様式の中でも特に食生活のあり方に着目し、家族愛のイデオロギーを問いながら、子どもの食に対する意識や行動と親の社会階層との関連について考察することを目的とする。子どもの教育達成や親の養育態度を社会階層とのかかわりで論じた研究は諸説あるが、食にかかわる生活様式とのかかわりで論じられた先行研究は多くない。本稿は、近代家族論と P. ブルデューの文化的再生産論を手がかりとして、子どもの食と社会階層とのかかわりについて高校生を対象に行った質問紙調査の分析を通して考える試みである。

2. 先行研究の検討

食と社会階層とのかかわりについて論じた先行研究として、近代家族論とブルデューの文化的再生産論を検討する。

(1) 近代家族論

まず、1980年代以降、日本の家族研究に根付いた研究視角である近代家族論の論議を、本論の主題に即して検討する。小山によれば、従来の家族のあり方とは異なる新しい家族を示すものとして、「家庭（ホーム）」という言葉が登場したのは明治20年代のことであったという（小山, 1999）。ただこの時代の家庭という言葉の普及は必ずしも実態としての家庭の成立を意味しているわけではなく、現実に先立つ、言説としての家庭の登場であったようである。このとき考えられていた家庭の特徴を、小山は三点にまとめている。第一に性別役割分業が行われていること、第二に「一家団欒」「家庭の和楽」などの家族成員の心的交流に高い価値が付与されていること、第三に子どもは愛情を注ぎ、身体的世話にとどまらず知的・心理的発達にも留意せねばならない存在として位置づけられていたこと、である。このような家庭があるべき家族像としてめざされ、第一次世界大戦後になると「新中間層」と呼ばれる人々が、この「言説として語られた家庭」を実態化していった。この新中間層で登場した新しい家族形態では、新時代にふさわしい生活のあり方に関心がもたれた。そして従来の生活の改善が目指されていくとともに、家事のあり方も大きく変わった。その意味では家事に対する要求水準が随分高くなり、主婦たちは、栄養に配慮した食事を準備すること、家計の管理を行うこと、子どもに格別の配慮を払って育児をすること、一家団欒を追及することなどが求められた。普段の食事の準備もかなり神経を使うものとなり、主婦たちには献立の多様性や料理の充実なども期待されるようになった。小山によれば、家庭で毎日何を食べるかということに関心が払われるようになったのは、歴史的にみれば比較的新しいことで、「家庭料理」は「歴史的な概念」である、という。こうした生活改善は、新中間層による新しい生活の模索であるとともに、あるべき生活像や家族像が国家によってデザインされた結果だったと小山は指摘している（小山, 1999）。

近代家族論の検討を通して、今日、多くの人々によって「あるべき」ものとされる食のあり方が家庭概念の形成・普及過程の中で歴史的に形成されたこと、その担い手が「新中間層」という社会階層に属する人々であったことが明らかになった。では近代的な家庭の価値とセットになった「望ましい食」の観念と社会階層とのかかわりは、その後どのように展開して今日に至っているのだろうか。このことに直接答えた先行研究はないが、教育と社会階層に関する先行研究を敷衍して考えることは可能である。広田によれば、近代家族の形成期には「新中間層」の人々に固有のものであった「子どもの教育に熱心」な価値観と態度（広田の用語では「教育する家族」）は、高度成長期に被雇用者層に広まり、さらに1980年代以降になると、ほぼ全ての社会階層の親が、子どもの教育・進学を重視する「教育する家族」を志向するようになった（広田, 1999）。このように形成期には新中間層固有の価値観であった「教育する家族」が全階層に行きわたったことを強調する議論がある一方で、現代社会における教育をめぐる階層差を指摘する議論もある。中村は1995年SSM調査データの分析を通じて、男女とも年齢が若くなるにしたがって高卒者、ブルーカラー層において高学歴志向が減少している、として、学歴の社会的効用に対して冷めた意識が広がっており、教育と階層の関係が今後は次第に明確になっていくのではないかと、した（中村, 2000）。本田も母子関係について「子どもの気持ちをよくわかっている」「子どもに対してやさしくあたたかい」という「共感主義」と、「勉強や成績についてうるさく言う」「子どもに対してはきびしい」という「権威主義」という二つの要素を併せ持つ「全面型」の母子の一方に、いずれの要素も持たない「希薄型」の母子もあり、特に親が時間的資源、文化的資源を欠いたグループにおいて、子どもの成績が「ふつう」であることに満足し、それ以上の成績向上や高い学歴達成を特に期待しないケースが相当数あることを指摘している（本田, 2004）。

現代の「食」を含む望ましい生活のあり方と社会階層を考える視点として、教育と社会階層にかかわる議論は参考になる。生活様式に関する行動や「望ましさ」の感覚は、広田が「教育する家族」について論じたように全階層に行きわたったのだろうか。あるいは、現代家族の教育達成志向の階層差について指摘されるように、生活様式の階層間格差は存在するのだろうか。4の実証分析を通してこの問いへの解答を試みる。

(2) 文化的再生産論

次に文化的再生産論の検討を通して、食と社会階層を考える視点を抽出しよう。文化的再生産論にはアメリカ社会学におけるサブカルチャー論、言語社会化と不平等に関する理論（バーンスタインなど）なども含まれるが、狭義にはフランスの社会学者ピエール・ブルデューのそれを指すことが多い（宮島・藤田, 1991）。フランスでは、公教育の無償の理念、バカロレア取得者の無試験入学の原則があり、高等教育進学の障壁は概して低い、とされている。入学試

験を課している高等専門学校（グランド・ゼコール）では、「能力」による以外の不公平は認めないとして、あらゆる社会階級に対して開かれていることを公言してきた。しかし学ぶ者の社会的な構成については、依然として高等教育機関が上層階級の子弟にはるかに広く開かれているのが現実である。高等教育への「民衆レベル」からの接近が、少なくとも経済的には不可能ではないとみえながら、現実には困難であるのはなぜであろうか。ブルデューは文化に着眼する一連の分析を通して、経済の障壁とならんで、場合によってはそれ以上にのりこえがたいカベとして、文化の障壁があって、それが社会的層化あるいは不平等を再生産する要因となっているのではないかという見方を提唱した（宮島，1994）。

日本における文化的再生産論の枠組みを用いた実証研究には、片岡の研究がある。片岡は、1995年のSSM全国調査データを用いて文化資本¹⁾の効果を検討している²⁾。「子どもの頃、家族のだれかがあなたに本を読んでもらったか」という項目を「読書文化資本」の指標として、「小学生の頃、家でクラシック音楽のレコードをきいたり、家族とクラシック音楽のコンサートにいったことがありましたか」「小学生の頃、家族に連れられて美術展や博物館に行ったことがありましたか」という項目を「芸術文化資本」の指標として、これらが地位達成過程で及ぼす効果を、片岡は詳細に分析している。その結果、「読書文化資本」は階層差が全くないというわけではないものの、かなり大衆化したしつけ行為であるのに対して、「芸術文化資本」に関しては支配的な階層ほど芸術資本を子どもに伝達しており階層差が大きいことを明らかにしている（片岡，2001）。

これらの文化的再生産論から得られる視点は、音楽や絵画に代表される具体的な「文化」のみならず、広く価値観のようなもの、いわばハビトゥス³⁾としての「文化」も含めて、家庭で身につけてくるものが、学校文化と適合している者が学校でより良く能力を発揮できる、ということである。

では、家庭における生活様式はどのようなのだろうか。生活には様々な活動があるが、それらも文化活動と同様に多様性とは捉えられずに、何らかの優劣がつけられていることが多いように思われる。例えば「家庭科の教科書」が示すような生活をしている、学校にとって「望ましい」家庭環境にある子どもは、その教科のみならず「自分の家は教科書に載っているような家庭だ」と確認することにより（その確認が全く無意識のうちに行われているのだとしても）、学校という場が居心地が良くなり、そして学校生活全般でより良く能力が発揮できる、などということはあるのだろうか。

ブルデューは生活様式について詳細な調査を行っている。「生産労働者から職工長・職人・小商人を経て、商・工業経営者へと移るにつれて…経済的拘束はゆるやかになっていく。…金があればあるほど消費される食物は豊かに（すなわち高価であると同時にカロリーも豊かに）なり、また重たくなってゆく（猟肉やフォワグラなど）。これとは逆に自由業〔主として医師、

弁護士、建築家などの独立専門職を指す]や上級管理職の趣味は、大衆の趣味を重たいもの、脂っこいもの、下品なものへの嗜好として否定的にとらえ、自らは軽いもの、繊細なもの、洗練されたものへと向かっていく。つまり経済的拘束が除去されると、上品さやほっそりした身体を得るために下品さや肥満を禁じようとする社会的検閲が強化されるのである。…最後に教授層は、経済資本よりも文化資本が豊かであり、それゆえあらゆる領域において消費を禁欲にする傾向があるため、最小のコストで異国趣味（イタリア料理、中華料理など）や庶民性（田舎料理）へと向かう独自性を追求しようとする点で、金持ち（成金）およびその豪勢な食物に対立する」（Bourdieu,1979=1990, 282-283, 省略は筆者による）。これは食糧消費における職業間の差異を指摘したものなのだが、ブルデューの分析は、好む料理やよく用いる調理法、供し方などの振る舞いにも及び、それぞれの階級に特有の行動を明らかにしている。

ブルデューの生活様式論は、食をめぐる趣味や嗜好といった一見きわめて個人的なものに見える事柄が社会階層的な文脈の中に位置づけられていることを明確に示したものである。日本でブルデュー理論を応用した研究の中で、この論点を本格的に展開した研究はみられず、日本における食の社会階層的な文脈を明らかにすることは、ブルデュー理論の展開可能性という点からみても、重要な課題である。

3. 調査の概要と分析課題

(1) 調査方法

以上のような問題関心に基づき、高校生の家族関係と食生活の実態に関する社会調査を実施した。調査方法は、愛知県立高等学校（7校）の高校2年生を対象にした質問紙調査である。

対象校の多様性を確保するため、愛知県尾張地区の県立高校のうち全日制（定時制併置を含む）高校（92校）を、普通科／専門学科、高等教育進学率、さらには国公立大学合格率、という三つの基準を用いて、四つの学校タイプに分類し、対象校を設定した（表1）。

表1 本調査における学校タイプの分類

学校タイプ	特 徴
①専門学科	専門学科の高校
②普通科A	高等教育進学率60%以上で、国公立大学への合格者が、進学者の30%以上を占める進学校
③普通科B	高等教育進学率60%以上で、②に該当しない高校
④普通科C	高等教育進学率50%未満の普通科高校

（愛知県小中学校長会・愛知県立公立高等学校長会編 『公立高等学校ガイドブック2004』の卒業後の進路状況より筆者作成）

愛知県立の普通科高校68校のうち、統合により在校生が3学年そろっていない6校を除いた62校を上記の基準により分類した。②に該当する高校17校、③に該当する高校29校、④

に該当する高校 10 校となった。それぞれを無作為抽出法で 2 校ずつ抽出し、合計 7 校から協力が得られた。専門学科 24 校は機縁法で 2 校を選び 1 校から協力を得た。専門学科を持つ 1 校には 4 クラス、他の 6 校には 2 クラス分の調査を依頼した。

調査方法は、質問紙調査による集合調査、調査実施時期は 2005 年 7 月と 9 月である。全体の有効回収数（率）は 514 票（88.2%）である。

(2) 調査項目

食に関する調査項目は以下のとおりである。調査票は以下の項目と属性変数で構成されている。

(a) 食べ物への嗜好性

いちご、メロン、野菜の煮物、サラダ、焼肉、鶏のから揚げ、焼き魚、うなぎの蒲焼き、にぎり寿司、ごまあえ、茶わん蒸し、グラタン、ラーメン、プリン、クレープ、生春巻き、ボルシチ、ビビンバ、チヂミ、キムチの 20 問（6 件法）

(b) 本人の食生活の実態

「朝食を食べるか」「朝食は誰と食べるか」「学校がある日の昼食はどのように用意するか」「夕食は食べるか」「夕食にどんなものを食べるか」「朝食、昼食、夕食以外にも何か食べるか」「朝食、昼食、夕食以外にどんなものを食べるか」の 7 問

(c) 家庭での食習慣

「健康について話題にする」「食事中、マナーについて注意される」「外食に行く」「喫茶店に行く」「デリバリーサービスを利用する」「手作りで菓子やパンを作る」「家族それぞれが自分の好きなものを買ってきて食事にする」の 7 問（4 件法）

(d) 本人の食に関する行動

「食べ物を買う時に添加物などに注意すること」「栄養面に気を配って食事をする事」「体型のために食事を制限すること」「自分の得意料理を増やすこと」「家族と一緒に食事をする事」「箸使いなど、マナーに気をつけること」の 6 問（4 件法）

(e) 将来の食行動

「減農薬・有機栽培・無添加などの安全な食品を手に入れること」「子どものお弁当を手作りすること」「家族と一緒に食事をする事」「高級なレストランに食事に行くこと」「子どもに買い食いをさせないようにすること」「子どもに食事マナーをしつけること」「人を雇って、家族の食事を作ってもらふこと」の 7 問（4 件法）。また、そのように考える理由を「親や親戚の行動をみて」「知人や友人の行動を見て」「学校で習ったから」「子どものことを考えて」「雑誌やテレビで見て」などの 6 選択肢からそれぞれ一つを選択してもらった。

(f) 食を中心とした、生活活動に対する価値観

「マナーを守って食事をする」「サプリメントを活用する」「パンやお菓子などを手作りする」「マンガや雑誌を読む」「家族と一緒に食事をする」「ラーメンを食べに行く」「デリバリーサービスを利用する」「栄養のバランスを考えて食事を作る」「小説や歴史の本を読む」「フランス料理を食べに行く」「インスタント食品や加工食品を利用する」「美術館や博物館に行く」の12項目（5段階の評定法で回答）

(3) 調査対象者の属性

調査対象者の属性を、表2に示す。父親の職業は、1995年SSM調査に比べると、やや「熟練的職業」が少ない。母親の就労形態は、2000年国勢調査（愛知県）における30代女性と比べると、「専業主婦」が少ない。父親、母親の学歴は、同じく2000年国勢調査（愛知県）における30代から40代前半の男女の学歴と比較すると、いずれも「中学校・高校」卒業者の割合が、やや少ない。このように、全国あるいは愛知県全体の社会階層構成をそのまま反映したデータではないものの、階層分析を行うのに十分な多様性を確保することができた。

表2 調査対象者の属性 (%)

性別 (N=514)		父親の学歴 (N=514)	
男性	49.4	中学校・高等学校	33.5
女性	50.2	短期大学・高等専門学校	4.9
無回答	0.4	四年生大学	30.4
父親の職業 (N=514)		その他	2.5
専門的職業	5.3	あてはまる人はいない	2.5
管理的職業	12.1	不明	26.3
事務的職業	19.6	母親の学歴 (N=514)	
販売的職業	5.3	中学校・高等学校	39.3
熟練的職業	6.8	短期大学・高等専門学校	20.6
半熟練・非熟練的職業	20.4	四年生大学	13.6
農業的職業	1.9	その他	0.6
その他	1.0	あてはまる人はいない	1.0
特に決まった仕事についてない	0.2	不明	24.9
今は働いていない	1.0	母のライフコース (N=514)	
あてはまる人はいない	3.3	結婚前からずっと仕事を続けてきた	18.5
不明	23.2	子どもが大きくなってから、再び働きはじめた	39.1
母親の就労形態 (N=514)		ずっと、自営の仕事や内職を続けてきた	2.7
経営者	1.9	ずっと家事・育児をしてきた	13.4
正社員・正職員	14.4	その他	2.1
パート・アルバイト・臨時雇用	39.9	わからない	9.1
自営業主	3.3	あてはまる人はいない	1.2
家族従業者	2.7	不明	13.8
その他	0.8	家族構成 ^{注)} (N=452)	
専業主婦（無職）	17.7	父母と子	58.2
あてはまる人はいない	1.2	一人親と子	11.3
不明	18.1	祖父または祖母・親・子	30.5

注) 「一緒に暮らしている人」に複数回答した結果を、組み合わせた変数である。

(4) 分析課題

調査の具体的な分析課題として以下の課題を設定した。①近代家族の成立とともに普及していった「あるべき食生活像」は、現代の高校生にも「望ましい」ものとして価値を置かれているのか。②現在の日本の食生活においてブルデューが示したような社会階層に特有のスタイルは存在するのだろうか。③食にかかわる意識や行動と、親の教育に対する意識とはどのような関係にあるのか。

4. 結果と考察

(1) 将来の食行動について

まず、生徒が考える将来の食生活像についてみる。「家族で一緒に食事をする事」(図1)と「子どもに食事マナーをしつける事」(図2)は、何らかのかたちで「やりたい」と考えている生徒が大勢を占めている⁴⁾。ともに「ぜひやりたい」も半数を超えている。「家族で一緒に食事をする事」については「本人の食に関する行動」でも同様の質問をしており、結果は「ほとんどしない」生徒が8.4%、「あまりしない」生徒が14.0%であった。しかし将来像となると「やりたくない」や「あまりやりたくない」がかなり少なくなるので、家族で一緒に食事をする事は「望ましい」食生活像として、生徒たちにとって規範的な意味を持っていると考えられる。食事マナーについても同様の質問を、「家庭での食習慣」と「本人の食に関する行動」で行っている。家庭で食事マナーを注意される生徒は49.4%で、実際に自分がマナーに気をつけている生徒は58.5%であった。しかしそれよりもずっと多くの生徒が、子どもに食事マナーをしつけたい、と考えており「食事マナー」は子どもへの標準的なしつけの一分野となっていることが考えられる。一方、「人を雇って、家族の食事を作ってもらう事」(図3)は、圧倒的に否定群が多く「やりたくない」が半数を超えている。家庭での食事作りに他人が入り込むことはかなり抵抗があるようである。食を通した一家団欒の追及、食を通したしつけ、食にかかわる家事労働者雇用への抵抗感など「あるべき」家庭像・生活像の規定力は、全体に強いと思われる⁵⁾。

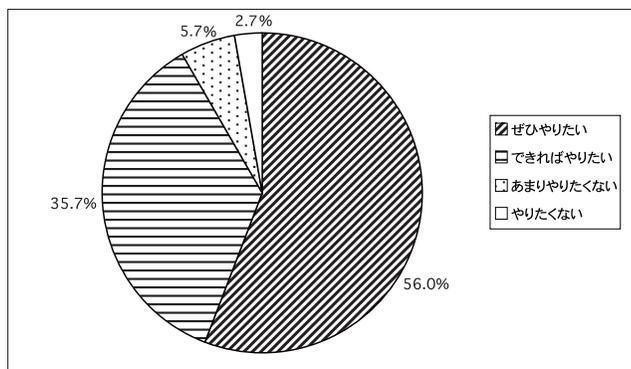


図1 将来の食行動：家族と一緒に食事をする事 (N=513)

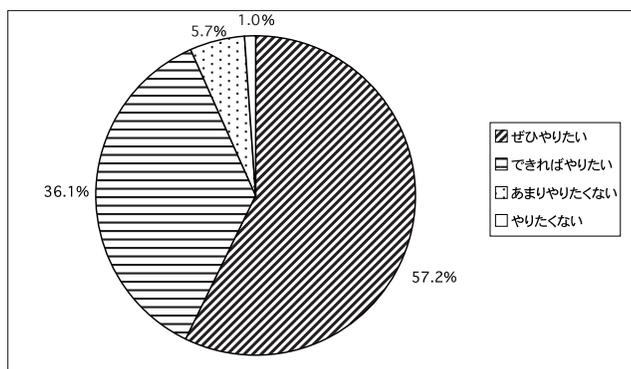


図2 将来の食行動：子どもに食事マナーをしつけること (N=512)

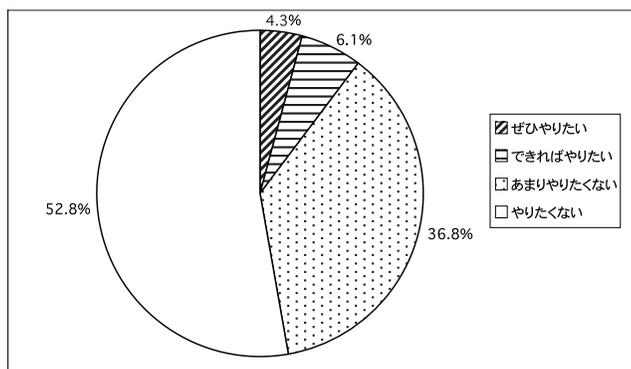


図3 将来の食行動：人を雇って、家族の食事をつくってもらうこと (N=511)

(2) 食に関する意識・行動と社会階層

将来の食生活については、かなり一致した「理想像」が思い描かれているようである。では、食生活の実態や意識と社会階層とのかかわりはどうか。ブルデューが示したような各階級に特有な生活様式は、食生活の領域に見られるのであろうか。親の学歴、職業ごとに、子どもの食生活の実態をみることで、この問いに答えることにしよう。

まず親の学歴との関連をみる。3(2)で示した(a)~(e)の全項目と親の学歴とのクロス分析を行った結果、統計的に有意な関連がみられた項目のみ、表3に示す⁶⁾。

表3 親学歴と食に関する意識・行動とのクロス分析(カイ2乗検定)

		父 学歴	母 学歴
嗜好性	メロン	**	
	ごまあえ	*	
	生春巻き		*
食生活の実態	朝食は誰と食べることが多いか	*	
	学校がある日の昼食はどのように用意するか	*	
家庭の食習慣	食事中、マナーについて注意される		*
本人の食に関する行動	食べ物を買う時に添加物などに注意する		*
	栄養面に気を配って食事をする		**
	体型のために食事を制限する		*
将来の食行動	減農薬など安全な食品を手に入れること	*	**

注1) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

注2) 父親の学歴については、中学校・高等学校卒業と高等教育卒業(短期大学・高等専門学校および四年制大学)の2グループに分けて、母親の学歴については、中学校・高等学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業の3グループに分けて分析を行った。

1%水準で有意な差がみられた項目について、以下に知見を示す。

- ① 「メロン」については、父の学歴と関連があり、父親が高等教育機関を卒業している家庭の生徒にメロンを好むものが多い。
- ② 「栄養面に気を配って食事をする」ことは母の学歴と関連がある。母親が四大を卒業している生徒に何らかのかたちで「する」ものが多い。
- ③ 「減農薬などの安全な食品を手に入れる」ことは母の学歴と関連がある。母親が短大・四大を卒業している生徒に「ぜひやりたい」が多い。

親の学歴との関連は全体に強くなかったが、マナーや添加物・栄養・減農薬など食生活に対して何らかの知識を必要とする領域では、母親の学歴が関連し、「嗜好性」や「食生活の実態」は、父親の学歴とやや関連があるようである。

次に親の職業との関連をみる。親の学歴と同様、3(2)で示した(a)~(e)の全項目とのクロス分析を行った結果、統計的に有意な関連がみられた項目のみ、表4に示す。

表4 親職業と食に関する意識・行動とのクロス分析（カイ2乗検定）

		父職業	母就労形態	母ライフコース
嗜好性	生春巻き	*		
食生活の実態	朝食を食べるか	**		**
	朝食は誰と食べることが多いか			*
	学校がある日の昼食はどのように用意するか			***
	夕食を食べるか	**		
家庭の食習慣	手作りで菓子やパンを作る		*	
	家族それぞれが自分の好きなものを買ってきて食事にする	*		
本人の食に関する行動	家族と一緒に食事をする		*	*
	箸使いなどマナーに気をつける			*
将来の食行動	将来、高級なレストランに食事に行くこと	*		
	将来、子どもに買い食いをさせないようにすること			**
	将来、人を雇って家族の食事を作ってもらうこと		*	

注1) * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

注2) 父親の職業は、技能労働、事務・販売職、管理・専門職の3グループに分けて、母の職業は、正社員・正職員、パート、自営業、専業主婦の4グループに分けて、母の働き方は、結婚前からずっと仕事を続けてきた、子どもが大きくなってから再び働きはじめた、ずっと家事育児をしてきた、の3グループに分けて分析を行った。

1%水準で有意な差が見られた項目について、以下に知見を示す。

- ① 「朝食を食べるか」については、「父職業」と「母ライフコース」で関連があった。技能労働者の家庭は、他の職種に比べて、朝食を「ほぼ毎日食べる」が少ない。また、母親がずっと仕事を続けている家庭は、他の家庭と比べて朝食を「ほぼ毎日食べる」が少なくなる。
- ② 「学校がある日の昼食」については、「母ライフコース」と関連があった。母親がずっと家事・育児をしてきた生徒は100%が「家から弁当を持参することが多い」のに対して、ずっと仕事を続けている家庭は、購買の利用や通学途中に買うことも多い。ただし、この質問項目は「母就労形態」とは関連がなく、母親が専業主婦だと弁当持参が多くなる、というような関連はなかった。
- ③ 「夕食を食べるか」については、「父職業」と関連があり、技能労働者の家庭で夕食を「ほぼ毎日食べる」がやや少なくなる。
- ④ 将来「子どもに買い食いをさせないようにすること」については、「母ライフコース」と関連があり、母がずっと仕事を続けている家庭の生徒に、「ぜひやりたい」が多い。

総じてみると、学歴と同様に親の職業との関連についても、1%水準での関連が見られた項目は多くはない。この三変数の中では「母のライフコース」が最も影響力がある。中でも興味深いのは「学校がある日の昼食はどのように用意するか」の項目で、母が「ずっと家事・育児」だと、弁当持参が100%だが、これは現在の「母の職業」とは関連が見られなかったことである。「子どもの弁当づくり」という生活様式に対して、現在「専業主婦」であるかどうかではなく（つ

まり絶対的な時間がある、ない、ではなく)、「ずっと家事・育児をしてきた」というライフスタイルが決め手になっていることが示唆される。

以上、親の学歴、職業、母のライフコースと、高校生の食に関する意識と行動との関連について検討した結果を総合して考えると、ブルデューが1970年代のフランスについて論じたような「各集団に特有の生活様式」とまでいえる傾向は表れていないように思われた。現代日本の食行動と意識は、社会階層によって直接規定される領域ではない、と言えそうである。

ブルデューは、食料消費にあらわれる職業間の差異を明らかにしているが、本調査における嗜好性の項目では、学歴、職業による特徴はほとんどなかった。現在の日本は全体に物が豊富であることに加え、販売方法の多様化などによりいわゆる「高級料理」や「高級食材」は少なくなりつつある。ある世代の人々にとってはにぎり寿司は「高級料理」の一つかもしれないが、最近では回転寿司などの比較的安価な寿司屋も増え、またスーパーマーケットの惣菜売り場などでも気軽に買えるようになってきている。例えばにぎり寿司をよく食べ、それが大好きだからといって、「あの家は高級なものばかり食べている」とはあまり思われたいのではないだろうか。加えて芸術などに比べると、食べることは比較的多くの人が接近しやすい分野だと思われる。「異国趣味」の料理もすぐにテレビや雑誌で作り方が紹介されたりするから、必ずしも「文化資本が豊か」な層でなくても取り入れることはできると考えられる。そういう意味では料理や食材への嗜好性が社会階層を特徴づける、といったことは現在の日本ではあまりないものと思われる。格差があるのだとしたらそれはより細かい部分、例えばどんな店で食べたり買ったりののか、というところで表れてくるのかもしれない。

社会階層との関連を考察した「嗜好性」、「食生活の実態」、「家庭での食習慣」、「本人の食に関する行動」、「将来の食行動」の5分野の質問項目群の中では「食生活の実態」「本人の食に関する行動」において、親の学歴や職業の影響が相対的に強くみられる。さらにその中で、母親の学歴およびライフコースの、相対的な影響力に注目される。母親の学歴は「栄養面への配慮」のような、知識を必要とする行動に対して、母親のライフコースは朝食を食べるかどうか、昼食の摂り方といった、具体的な食行動との関連を示していた。日常生活における「食」分野が母親によって担われているからであろうか。いずれにしても、社会階層を生活領域とのかかわりで論じるとき、母親の階層の規定力に着目する必要性を示している。

(3) 教育に対する意識との関連

次に、食に関する意識・行動と親の教育に対する意識との関連について検討しよう。子育てに時間的・金銭的資源を投資し、より高い教育達成を与えようとする近代的な子育て、教育意識は、食をめぐる意識・行動とどのような関係にあるのだろうか。

表5 高い教育・お金と手間をかけた子育てと、食に関する意識・行動とのクロス集計
(カイ2乗検定)

		高い教育	お金と手間
食生活の実態	学校がある日の昼食はどのように用意するか	**	**
家庭での食習慣	健康について話題にする		**
	食事中、マナーについて注意される		**
	外食に行く		**
本人の食に関する行動	栄養面に気を配って食事をする		**
	箸使いなどマナーに気をつける		*
将来の食行動	減農薬などの安全な食品を手に入れる		**
	高級なレストランに食事に行く	**	***
	子どもに食事マナーをしつける		** #
	人を雇って家族の食事を作ってもらう	*	

注1) * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

注2) # 期待度数5未満のセルが20%を超えていることを示す。

ここでは親の「教育に対する意識」項目として、親が教育を重視する意識「私の親は、子どもにできるだけ高い教育を受けさせようとしている」および、親の子育てに投資する意識「私の家は、充分なお金と手間をかけて子育てをしている」を取り上げ、食に関する意識・行動にかかわる変数との関連を検討した。いずれも「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を肯定群、「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」を否定群として、食に関する意識・行動とのクロス分析を行った。その結果、統計的に有意な関連がみられた項目のみ表5に示す。

以下、表5において1%水準以上で有意な関連が見られた項目について知見を示す。

- ① 「学校がある日の昼食」について、「高い教育」、「お金と手間をかけた子育て」のいずれにおいても肯定群に「家から弁当を持参する」ことが多い。
- ② 家庭での食習慣について、「健康について話題にする」「食事中マナーについて注意される」「外食に行く」は、いずれも「お金と手間をかけた子育て」の肯定群に「よくする」や「時々する」が多い。
- ③ 本人の食に関する行動について、「栄養面に気を配って食事をする」は、「お金と手間をかけた子育て」の肯定群によくするが多い。
- ④ 将来の食行動について、「高級なレストランに行くこと」は、「高い教育」の肯定群に「ぜひやりたい」や「できればやりたい」が多い。また「減農薬などの安全な食品を手に入れること」「高級なレストランに行くこと」「子どもに食事マナーをしつけること」は、いずれも「お金と手間をかけた子育て」の肯定群に「ぜひやりたい」や「できればやりたい」が多い。

全体に子どもの食生活に影響を与えているのは「私の家は、充分なお金と手間をかけて子育てをしている」という、子育てに投資する意識の方である。親が「お金と手間をかけて子育てをしている」と子どもが感じている家庭では、食についても時間的投資を行い、健康やマナーに配慮し、外食への金銭的投資を厭わない傾向にある。子育てについての「金と手間」への投資は、食についても「金と手間」をかけ、自分の将来の生活における食に「金と手間」をかける意識に親和性を持つと言えそうである。

さらに興味深いのは、子どもの教育に関する二つの意識項目は、両親の学歴や父の職業と強い関連があることである（表6）。父母の学歴については親の学歴が高いほど、親は高い教育達成を志向し、お金と手間をかけた子育てをしている、と回答した子どもの割合は高い。父の職業については、管理・専門職および、事務・販売職の父を持つ生徒に「高い教育」を肯定する割合が高く、技能労働職の父を持つ生徒に「お金と手間をかけた子育て」を受けているとする生徒の割合が低い。

以上の結果を合わせて考えると、食に関する意識や行動は、学歴や職業の階層効果が直接表れる領域ではないが、親の子育てに投資するという意識を媒介して、階層の影響が間接的に表れてくる、と見ることができるかもしれない。さらに注目されるのは、子どもが現在「お金と手間をかけた子育て」を受けていると感じることは、子ども本人が考える将来の食生活像と関連を持つことである。親世代の子育てに投資する意識は、手間をかけた生活、高級感のある生活への志向性という形で、子世代が形成する生活に再生産されていく可能性がある。

表6 子どもの教育および食生活に対する意識と属性（カイ2乗検定）

	父 学歴	母 学歴	父 職業	母就労形態	母 働き方
私の親は、子どもにできるだけ高い教育を受けさせようとしている	**	***	**		
私の家は、充分なお金と手間をかけて子育てをしている	***	***	**		*

注) * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

5. おわりに

本稿を終えるにあたって、調査データの分析課題に沿って知見を要約するとともに、食と社会階層に関する理論的課題とかわらせて、若干の議論を行う。

まず将来の食行動に対する志向性の分析結果から、食を通した一家団欒の追及、食を通したしつけ、食にかかわる家事労働者雇用への抵抗感などは、対象者の大勢に支持されており、「あるべき」家庭像・生活像の規定力は全体に強いと考えられた。食をめぐる「望ましさ」の感覚は、現代高校生の大勢に共有された、規範性を持つものだとみることができそうである。

食をめぐる意識と行動に対する社会階層の影響を考えるために、親の学歴や職業、母親のラ

ライフコースによる分析を行ったところ、食に関する意識・行動とこれらの変数との関連は概して強くない、という結果が得られた、その中では本人の「食生活の実態」に「母のライフコース」と「父の職業」が、「本人の食に関する行動」に「母の学歴」が相対的な関連の強さをみせているが、総じて言うと、ブルデューが示したような、各階級に特有の生活様式と言えるほどの特徴は見られなかった。片岡は家庭における文化資本の伝達について、階層差の大きい領域と小さい領域があることを指摘しているが、21世紀初頭の日本において、食は階層効果がさほど表れない領域であると言えよう。「フォーマルな」芸術などに比べると食の領域は、多くの人が接近しやすく、習得に練習を必要としたり、造詣の深さを求められたりすることは少ない。それが「高級」なものであれ、「望ましい」ものであれ、比較的自分の生活に取り入れやすいことは考えられる。階層固有の生活様式が見られないのはそのためではなかろうか。

その一方で、子どもの立場からみた、親が子育てに投資する意識「私の家は、充分なお金と手間をかけて子育てをしている」は、食をめぐる意識と行動全般とある程度強い関連がある。この意識は「父母の学歴」および「父の職業」と強い関連があるので、日本では食生活に、学歴や職業の階層効果が直接表れるというよりは、子育てに投資する意識を媒介して階層効果は表れてくる、と考えられた。子育てに投資する意識が食生活に与える影響はそれなりに大きく、親の学歴や職業といった、誰の目から見ても明らかな「差」としては認識されないものの、新たな差異の感覚になる可能性はある。さらに子育てに投資する意識は、手間をかけた生活や高級感のある生活への志向性という形で子世代が形成する生活に、何らかのかたちで再生産されていく可能性がある。

生活様式も、「文化の障壁」のように学校文化への障壁となることがあるか、という問いに対して、本調査で得られたデータから実証することはできなかった。今後の課題としたい。

付記

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた各高等学校、生徒の皆さんに心よりお礼を申し上げたい。

注

- 1) ブルデューの文化的再生産論の、重要概念の一つで、「広い意味での文化にかかわる有形・無形の所有物の総体」を指す。具体的には、家庭環境や学校教育を通して各個人のうちに蓄積された知識・教養・技能・趣味・感性など（身体化された文化資本）、書物や絵画のように、物質として所有可能な文化的財物（客観化された文化資本）、学校制度や試験によって付与された学歴・資格など（制度化された文化資本）の三種類に分けられる（Bourdieu,

1979 = 1990, I ,v の「訳者まえがき」参照)。

- 2) 1995 年の SSM 調査 A 票で、子ども時代に経験した家庭の文化環境の質問項目が初めて採用されている。
- 3) これも、ブルデューの文化的再生産論の、重要概念である。「もろもろの性向の体系として、ある階級・集団に特有の行動・知覚様式を生産する規範システム」を指す。行為者の慣習的な行動は、ハビトゥスによって一定の方向づけを受け、規定されながら生産されていく、という見方をとる (Bourdieu,1979 = 1990, I ,vi の「訳者まえがき」参照)。
- 4) 図 1～3 は、不明・無回答を外したパーセンテージを提示している。
- 5) この「将来の食行動」から示唆される規範性の強さは、実態として、一般に「望ましい」とされる食生活をしていることを意味するわけではない。たとえば朝食を「ほぼ毎日食べる」生徒は 76.3%であり、約 2 割強の生徒が、毎日朝食をとってはいない。夕食ですら、毎日食べない生徒が 5.9%存在している。「将来の食行動」を想定したときにみられる規範性は、食生活の実態からも乖離していると考えられる。データの詳細は、佐藤 (2005) を参照されたい。
- 6) 本稿では紙面の都合上、クロス分析の詳細は提示せず、カイ二乗検定の有意水準のみ示す。詳細は、佐藤 (2005) を参照されたい。

参考文献

- 足立己幸・NHK「おはよう広場」班, 1983『なぜひとりで食べるの－食生活が子どもを変える』日本放送出版協会.
- Bourdieu, P. 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit, (石井洋二郎訳, 1990『ディスタクシオン I, II－社会的判断力批判』藤原書店).
- 広田照幸, 1999『日本人のしつけは衰退したか－「教育する家族」のゆくえ』講談社.
- 本田由紀, 2004『女性の就業と親子関係－母親たちの階層戦略』勁草書房.
- 片岡栄美, 2001『現代文化と社会階層』東京都立大学大学院博士学位論文.
- 小山静子, 1999『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房.
- 宮島喬・藤田英典編, 1991『文化と社会－差異化・構造化・再生産－』有信堂.
- 宮島喬, 1994『文化的再生産の社会学－ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
- 中村高康, 2000「高学歴志向の趨勢－世代の変化に注目して」近藤博之編『日本の階層システム 3－戦後日本の教育社会』東京大学出版会.
- 佐藤裕子, 2005『「食」と社会階層に関する研究－高校生に対する「食生活と家族関係」についての調査から－』愛知教育大学大学院修士論文.